

ソメイヨシノ元祖「上野に」

ソメイヨシノは東京・上野公園にある1本が原木となり、全国に広まったと考えられる、とする遺伝子解析などによる研究成果を千葉大のチームがまとめた。接ぎ木で増やされ、全ての木がクローンであるソメイヨシノ。謎とされる起源の解明につながる可能性がある。

原木の候補は、上野動物園の表門に近い「小松宮親王像」の北側にある。一帯は江戸時代から桜の名所で知られ、親王像の場所は寛永寺の鐘楼だった。コマツオトメという桜の原木と判明した木もあり、千葉大の中村郁郎教授（植物分子遺伝学）が以前から付近の木を調べていた。

中村教授らは今回、親王像を囲むソメイヨシノとコマツオトメ各1本、エドヒガン系5本の計7本の遺伝子の型を調査。7本は同じ親木から生まれた「きょうだい」と判明した。

「きょうだい」が一定の間隔で並び植えられていることから、中村教授らは「品種改良で人為的な交配で生まれたソメイヨシノや他の桜を並べて植樹した可能性が高い」とみている。

ソメイヨシノの起源は、エドヒガンとオオシマザクラが自然交配して生まれた、など諸説ある。中村教授は「人為的な交配の証しが見つかった以上、起源が自然交配とは考えにくくなった」と指摘。人工的に作られたと解析した上野公園のソメイヨシノが、最初の木だと推定している。

研究成果は21日から東京都内で開かれる日本育種学会で発表される。（野瀬輝彦）

